

太宰治の素顔



人間失格
斜陽
ヴィヨンの妻
走れメロス
東京八景
女生徒
パンドラの匣
グッド・バイ
津軽
お伽草子
きりぎりす
新ハムレット
ろまん燈籠
もの思う葦
桜桃
富嶽百景
駆込み訴え
葉桜と魔笛

もくじ

津島美知子

山岸外史

井伏鱒二

津島美知子

- 明治四十五年生まれ
- 東京女子高等師範学校を卒業後、山梨県立都留高等女学校にて地理と歴史を教える教師を務めた
- 昭和十四年に井伏鱒二の口利きにより太宰治と結婚



津島美知子の証言

- 太宰治はさびしがりやであった
- 文筆業者としては早起きの方だったという
- 午後三時前後で仕事はやめて、夜は執筆したことがない
- ✕切のための徹夜など絶えてない
- 昼間仕事するのは健康のためで、一日五枚が限度だと言っていた

(死の前年秋の某誌のインタビューでは、夜中はだれかがうしろにいてみつめているようでこわいから仕事しないと答えている)

- 太宰は紋服が好きな人で吉凶事あるごとに来ていた

津島美知子の証言

その2

- 太宰治は無趣味なひとだった
→ 趣味は遊びだ、逃避だと考えていたようだ
- 身の回りになってもなくても良いものをおくのが嫌いで、必需品だけ（趣味よりも機能で選んだ品）で簡素に暮らしたいらしかった
- 蔵書は持たず、よその蔵書をよく利用していた
- 大の蛇嫌いであった

津島美知子の証言

その3

太宰の好物

- 一番蟹が好物であった
- 「豆腐は酒の毒を消す」と
いって好んでいたが、実は歯
が悪いのと何丁食べても高が
知れているところから好んで
食べていた
- お弁当が好きで、外食が不自
由な時代ではよく弁当持参で
外出した

山岸外史

- 太宰治の大学時代に同人雑誌「青い花」がきっかけでで出会う
- 出会ってその日に急激に仲良くなる
(山岸外史曰く、太宰に才腕を感じ、ほんとに話のできる友人を感じたという)
- 14年間におよんだ交友関係

山岸外史の証言

- 太宰はわりと臆病だった、かなり臆病だったともいえるだろう

→太宰は金槌であったため、山岸とともに船に乗った際海の深い青さに怯えて大きな声をあげたこともあった

またふたりで湯河原に滞在していたとき、太宰は不動の滝の不動尊の石仏に恐怖していた

- 太宰は聡明な計算者であったと思う

井伏鱒二

- 中学時代、太宰治は同人誌に掲載されていた「山椒魚」のもととなる「幽閉」を読んで「埋もれたる無名不遇の天才を発見した」と語った
- 太宰治は東京帝国大学に入学してすぐ、井伏鱒二に手紙を送り、神田須田町の出版社で初対面する
- その後、井伏鱒二は文学の師だけでなく、公私ともに太宰治に手を差し伸べていた

井伏鱒二の証言

- 太宰君は大変お行儀がよく、小説について話をするときには端然と座り直すほどであった

→小説を一途に大事にしている学生であった

- 相当せっかちなところがあった

→夕方にくる約束をすると日も高いうちからきていた

- 太宰君は人に恥をかかせないように気を配る人であった

参考文献

- 増補改訂版回想の太宰治 津島美知子
1978年5月20日 初版発行
1997年8月30日 増補改訂初版第一刷発行
- 人間太宰 山岸外史
昭和三十七年十月二十二日 初版第一刷発行
- 太宰治 井伏鱒二
1989年11月20日 第一刷発行
- 別冊太陽 太宰治 生誕100年記念
2009年7月9日 初版第一刷発行

提供元 梅花web出版

製作者 I.A.

お借りした素材

コピーできる無料イラスト素材展

Linustock